

『象院題語』の句点について(下)

竹越 孝

(承前)

4. 分句の特徴

以下では、『象院題語』に付された二種類の句点、即ち奎章閣本における刻点と前間本における書点を対象として、本書の分句における朝鮮語的な要素を見ていくことにする。

ここで「分句における朝鮮語的な要素」⁹というのは、例えば次の『翻譯老乞大』と『老乞大諺解』の例のように、中国語における副詞や接続詞が、直後に句点を挿入されることによって助詞のように扱われていることを指す：

(122) 這們便。我減了五錢着。(下 22b2-3/20a10-20b1)¹⁰

(123) 這幾箇羊也。當走一遭。(下 23b4-5/21a9-10)

(124) 商量了價錢然後。樺了也不遲裏。(下 31b6-7/28b6-7)

上の例で“便”、“也”、“然後”に対応する部分の朝鮮語訳はそれぞれ -mien (～ならば)、-do (～も)、-hu-ei (～後に) であり¹¹、これは中国語において前置成分が表している意味を、朝鮮語では後置成分によって表現するために生じた再分析 (reanalysis) の一種と考えられる。『老乞大』や『朴通事』においてこうした例はごく少数であるが、『象院題語』ではその出現頻度が極めて高い。

本稿が問題とする句点のあり方には次の三タイプがありうる：(ア) 奎章閣本の刻点・前間本の書点とも朝鮮語的である；(イ) 奎章閣本の刻点は朝鮮語的だが前間本の書点は中国語的である；(ウ) 奎章閣本の刻点は中国語的だが前間本の書点は朝鮮語的である。以下、これらの区分に沿って用例を挙げていくことにする。

4. 1. “便”

『象院題語』では副詞“便”の直後に句点を付した例が非常に多い。まず、奎章閣本・前間本とも“便”の直後に句点がある(ア)のタイプは7例¹²：

(125) 見朝辭朝的日子便。闕左門裏頭。… (9/6a2-3)

⁹ 拙稿(2005a)ではこれを「分句における『朝鮮習』」と称している。ただし、これは朝鮮語の場合に限って見られる現象ではないので、「アルタイ諸語的要素」であるとも言える。

¹⁰ この他に、『翻譯老乞大』では句を分けないが『老乞大諺解』では“便”の後に句点を付す「這們便。我迎火伴去」(上 68b1-2/61b7-8)の例がある。なお、()内は「/」の左が『翻譯老乞大』、右が『老乞大諺解』の出处を示す。

¹¹ ハングルのローマ字転写は河野式による。

¹² (ア)のタイプは奎章閣本の句点により例を示す。

- (126) 見朝辭朝的日子便。鴻臚寺卿和禮部尚書。… (10/6b4-5)
- (127) 畫押便。一箇皂隸拿者投文牌出来。(12/8a6-7)
- (128) 九年滿了便。送吏部。(14/9b5)
- (129) 第一等便。正官出身。(14/9b5-6)
- (130) 第二等便。雜職官裏頭用了。(14/9b6-7)
- (131) 三位大人坐堂便。鎮撫官引宰相。… (17/12a3-4)

次に、奎章閣本の刻点は“便”の直後にあるものの前間本では句を分けない(イ)のタイプは2例¹³：

- (132a) 有闕便。北直隸八府富家子弟裏頭。… (14/9b2-3)
- (132b) 有闕便北直隸八府富家子弟裏頭。… (同上)
- (133a) 第三等便。只饋他冠帶閑住了。(14/9b7-8)
- (133b) 第三等便只饋他冠帶閑住了。(同上)

逆に、奎章閣本は句を分けないものの前間本の書点が“便”の直後にある(ウ)のタイプは1例：

- (134a) 這一等節日便關門不開。(5/4a6)
- (134b) 這一等節日便。關門不開。(同上)

上は句点が存在する部分に見られる“便”の用例のすべてである¹⁴。つまり、『象院題語』の“便”は、奎章閣本・前間本の双方あるいはいずれかが、常に朝鮮語的な分句で示されていることになる。

4. 2. “是”

筆者は拙稿(2006c)の中で、『象院題語』において“是”は動詞句と共起する例が極めて多く¹⁵、このことは同書の“是”が通常の中国語における copula とは異なる機能を持つ可能性を示唆すると述べた。奎章閣本で“是”の直後に刻点を付した例が12例見られることも、この可能性を支持する一つの材料である。同じ箇所を、前間本では“是”の直前に書点を付している例が多く、(イ)のタイプに属すると言える：

- (135a) 這箇庶吉士年例養育的規矩是。戸部出讀書的燈油錢。(6/4b5-6)
- (135b) 這箇庶吉士。年例養育的規矩。是戸部。出讀書的燈油錢。(同)
- (136a) 三法司是。刑部都察院大理寺。(7/5a4)
- (136b) 三法司。是刑部都察院大理寺。(同上)

¹³ 用例番号に付した a は奎章閣本、b は前間本を表す。

¹⁴ 第16篇における「擅便」(11a6)の例は除く。なお奎章閣本は17篇まで刻点があり、前間本は20篇まで書点が見られる。

¹⁵ 『象院題語』において“是”は全体で158例見られるが、“是”が単独で用いられる134例のうち、51例が“是+VP”の形を取っている。

- (137a) 都布按是。天朝外方三箇大衙門。(8/5b2)
 (137b) 都布按。是天朝外方三箇大衙門。(同上)
 (138a) 光祿寺是。管筵宴酒飯的衙門。(9/6a1)
 (138b) 光祿寺。是管筵宴酒飯的衙門。(同上)
 (139a) 鴻臚寺大通事是。御前答應的通事。(10/6b1)
 (139b) 鴻臚寺大通事。是御前答應的通事。(同上)
 (140a) 科道官是。科是六科給事中。… (11/7a1)
 (140b) 科道官。是科。是六科給事中。… (同上)
 (141a) 考夷語是。有大考小考。(13/8b7)
 (141b) 考夷語。是有大考小考。(同上)
 (142a) 朝鮮的序班是。講朝鮮的話。(13/9a1-2)
 (142b) 朝鮮的序班。是講朝鮮的話。(同上)
 (143a) 獐子的序班是。講獐子的話。(13/9a2-3)
 (143b) 獐子的序班是講獐子的話。(同上)
 (144a) 戶部的筭手是。筭計天下戶口錢糧。(14/9a8-9b1)
 (144b) 戶部的筭手。是筭計天下戶口錢糧。(同上)
 (145a) 兵部的筭手是。筭計天下軍馬軍糧。(14/9b1-2)
 (145b) 兵部的筭手。是筭計天下軍馬軍糧。(同上)
 (146a) 遞運所是。管車輛的衙門。(15/10a5-6)
 (146b) 遞運所是管車輛的衙門。(同上)

奎章閣本において“是”の直前に刻点を付した例はなく、“是”の直後に刻点を付すか、句を分けないかの二通りしかない。“是”の直後に刻点が付されるということは、そこに停頓が置かれるということに他ならない。『老乞大』・『朴通事』の諸刊本にこれに類する例は見られず、『象院題語』における大きな特徴とすべきであろう。“是”が動詞句と多く共起することを考え合わせるならば、このような現象が生じた原因は、“是”が日本語の「は」や朝鮮語の yn/nyn に当たる主題化の後置詞¹⁶としての機能を担っているためと考えられる。

4. 3. “後頭”

時間的な「後に」を意味する方位詞“後頭”もまた、『象院題語』ではそのほとんどの例で直後に句点が付されている。奎章閣本・前間本とも“後頭”の直後に句点を付した(ア)のタイプが11例と最も多い：

- (147) 糾儀御史排行站住後頭。錦衣衛校尉也是排行站住。(3/2b6-8)

¹⁶ 拙稿(2006c)では「提題の成分」としている。なお、中期朝鮮語では子音の後で@n/yn, 母音の後でn/n@n/nynが用いられ(@はアレアを表す)、李基文(1974: 邦訳28)によれば、モンゴル語にもこれにあたる後置詞niがあるという。

- (148) 千官毎。咳嗽後頭。鳴鞭三遭後頭。… (3/3a3-4)
 (149) 這般三遭後頭。又行四拜。(3/3a7)
 (150) 禮畢後頭。次次兒出来。(3/3a7-8)
 (151) 本衙門堂上看過了後頭。又請監察御史點看後頭。… (9/6a3-4)
 (152) 又請監察御史點看後頭。序班們纔請陪臣以下。(9/6a4-5)
 (153) 酒飯喫了後頭。到御路上行謝恩。(9/6a5-6)
 (154) 到月臺上禮畢後頭。一箇外郎拿者卯簿。… (12/8a4-5)
 (155) 教他稟堂上行公事後頭。一箇外郎叫說堂事畢了呵。… (12/8b3-4)
 (156) 冠帶後頭。有氣力的。先得牙牌作正官。(13/9a4-5)
 (157) 自家擅便不許出入後頭。本國送咨禮部告説。(16/11a6-7)

奎章閣本の刻点は“後頭”の直後にあり前間本の書点は“後頭”の直前にある(イ)のタイプが1例：

- (158a) 鳴鞭三遭後頭。動樂。(3/3a4)
 (158b) 鳴鞭三遭。後頭動樂。(同上)

奎章閣本は句を分けず前間本の書点が“後頭”の直後にある(ウ)のタイプは2例：

- (159a) 退朝後頭不論前後進來。(12/7b5)
 (159b) 退朝後頭。不論前後進來。(同上)
 (160a) 都司説接後頭行茶禮。(17/12b1)
 (160b) 都司説接後頭。行茶禮。(同上)

句を分けない1例¹⁷を除けば、以上が句点が存在する部分に見られるすべての“後頭”である。通常の中国語でも、“後頭”は単語レベルのものに付加された場合や間に“的”を挟む場合には直後に停頓を置くことができるので、上がすべて特殊な例であるとは言えないが、“後頭”の直前に句点を付す例が(158b)の1例しかないという事実から見て、両本ともこうした句点のあり方が習慣化していたことが窺われる。

4.4. “然後”

接続詞“然後”も1例あり、奎章閣本・前間本ともその直後に句点を付している：

- (161) 大理寺審録罪名然後。纔決罪了。(7/5a8)

“然後”の意味するところは上の“後頭”と大差ないが、機能面からすれば“然後”の直後に停頓を置くことは通常の中国語ではありえないので、中国語としての違和感はこちらの方が強い。

¹⁷ 「這們整齊後頭纔行禮」(3/3a2)では両本とも句を分けない。

5. おわりに

以上に見てきた例から、『象院題語』における中国語が、統語法のみならず¹⁸分句の面においても甚だ朝鮮語的な特徴を有していることが了解されよう。

そして、こうした特殊な分句のほとんどが、原所蔵者が書き入れたとおぼしい前間本の書点ではなく、あらかじめ版木に彫られていた奎章閣本の刻点に見られることの意味は大きい。「象院」の名が示す通り、『象院題語』は司訳院で編纂された対明外交用の中国事情読本だからである¹⁹。そうした、いわば公けの教材において、母語の影響を大きく受けた句点が堂々と提示されていることは、司訳院で教えかつ学ばれた中国語というものの性質を考える上で興味深い問題を提供するものであろう。

<参考文献>

- 竹越孝 2005a. 「『翻譯老乞大』と『老乞大諺解』における分句の相違」, 『KOTONOHA』31 : 3-8.
- 竹越孝 2005b. 「朝鮮司訳院の漢学書『象院題語』について」, 『汲古』48 : 44-49.
- 竹越孝 2005c. 「『象院題語』の版本と冊板」, 『KOTONOHA』37 : 4-8.
- 竹越孝 2006a. 「前間本『象院題語』のハングル音注について」, 上, 『KOTONOHA』38 : 10-16 ; 下, 『KOTONOHA』39 : 11-15.
- 竹越孝 2006b. 「〈資料〉『象院題語』翻字」, 『開篇』25 : 63-72.
- 竹越孝 2006c. 「『象院題語』の語彙と語法」, 『中国語研究』48 : 1-14.
- 李基文 1974. 『改訂国語史概説』, ソウル : 民衆書館 ; 藤本幸夫訳 1975. 『韓国語の歴史』, 東京 : 大修館書店.

¹⁸ 『象院題語』の統語法がいわゆる「漢児言語」的な特徴を持つことについては拙稿 (2006c) を参照。

¹⁹ 『象院題語』の史料的位置づけについては拙稿 (2005b) を参照。